

# 魚坊三回忌追善集『菴記念』『庵のかたみ』

伊藤善隆

## はじめに

本稿は、中島魚坊（享保十年～寛政五年）の三回忌追善集『菴記念乾』・『庵のかたみ 坤』（個人蔵）を翻刻・紹介するものである。

魚坊は、石見・出雲で活動した美濃派の主要俳人である。初号を美川、別号を猿中窟、隣江庵、鬬草子、橘皮仙人、しのぶ庵、徒然庵などと呼称した。

生まれは、石見国安濃郡大田南村。はじめ和漢の学と俳諧を大田の中島見龍（俳号流露竹）に学んだ。魚坊の父は美三と号して仙石廬元坊門の俳人であったが、魚坊自身も美濃派の田中五筑坊に師事した。なお、本書に跋文を寄せた備前岡山の森々庵松後（再和派六世道統）も、仙石廬元坊、田中五竹坊門の俳人である。また、魚坊は杵築の広瀬百羅に和歌を学んだというが、その百羅（百羅）は、本書上巻第六

丁表に追悼句を寄せている。

宝暦十年、魚坊は大田の大火で焼け出され、城平（大田町大田字城平）に潜魚庵を結んだ。明和五年には愛児を失い、その年の大晦日に剃髪して魚坊と号した。その後、安永八年に坂田村（出雲市斐川町）の豪農である勝部見山（魚坊門の俳人）の援助により出雲へ移って隣江庵を結び、さらに斐伊川の付け替え工事に際しては伯州米子に移った。そして、再度出雲の今市へ戻ってしのぶ庵を結び、そこが終の棲家となったという。

魚坊に関する研究としては、松井立浪『俳人魚坊』（報光社、昭和25年9月）がある他、桑原規草『出雲俳壇の人々』（だるま堂書店、昭和56年8月）にも言及がある。両書には『菴記念』に関する記事も載っているが、全文の翻刻はされていない。

また、本書を国文学研究資料館のホームページ「日本古典籍総合目

録データベース」で検索すると（令和2年10月31日確認）、坤卷（『庵のかたみ』）のみ、天理大学附属天理図書館綿屋文庫に収蔵されていることが判る。なお、『綿屋文庫俳書目録』と『日本古典籍総合目録データベース』は、ともに本書を「天明年間」の刊行としているが、翻刻をご参照頂ければ判るとおり、本書坤卷には成立年や刊年を特定できる情報は記されていない。上巻に載る序文によって、魚坊の「大祥忌」にあたって編集したものであること、また「寛政乙卯」（寛政七年）の成立であることが判明するのである。

本書は、魚坊の伝記や作品を知るための基本的な資料として、また石見・出雲の美濃派資料として貴重なものといえよう。しかし、これまでに全文が紹介されたことは確認できず、また目下のところ乾卷（上巻）は他に所在を聞かない。ここに翻刻紹介する所以である。

### 〈書誌〉

書型……半紙本二冊。二二、八cm×一五、八cm。袋綴じ。楮紙。

表紙……香色布目原表紙。

題簽……乾坤卷とも原題簽。中央無辺。「菴記念 乾」（上巻）、

「庵のかたみ 坤」（下巻）。

序文……「于時寛政乙卯冬霜月下浣 桃後園 路考」。

版式……無辺無界每半葉八行。

字高……一七、四cm（乾卷初丁二行目（序文本文一行目「世に」

もの」を計測）。

跋……乾卷跋「千阿房」、坤卷跋「森々庵」（松後）。

刊記……「蕉門書林／皇都寺町通二條／橘屋治兵衛梓」（「下十七」

裏）。

丁数……乾卷全三九丁、坤卷全二七丁（丁付は柱にそれぞれ「上

一」／「上卅九」、「下二」／「下十七」。

### 〈凡例〉

翻刻にあたり、句読点、濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。

なお、原本に濁点のあるものは傍らに「」を付した（例「ども」）。

ただし、濁点の付く文字の大きさが小さいものは、その直前に「」を

挿入した（例「サ・ズカ 桃雨」）。

また、難読の文字は□で示した。

異体字等は概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、（）内にそ

の丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

### 〈翻刻〉

菴記念 乾

（白紙）

「（上巻表紙）

「（上巻表紙）

〔翠栢苦〕（刻陽）

序

世に俳諧をよくして俳諧をしらざるものあり。俳諧をしらずして俳諧をよくすものあり。俳諧をよくいひ俳諧をよく行ふものは稀なり。しかるに、しのお庵の魚坊叟は、生涯烟霞の痼疾に身をやつして、美濃は宗師の国なれば都浪花の往還りは更にいはず、誰しらぬひの」(上二) 筑紫に草鞋を踏破り、四国の旅寐の木枕には袖をかたしきしことども、折く笑ひのたねなりしなり。まだ見ぬかたに人まつ島象潟の月、三越路の雪をおもひやりては、翁の跡の細道をこそしたはしなど、常く語り申されき。されど、光陰人を待ず、寛政五癸丑の天中冬末の四日忍土を辞せらしも、はや大祥忌とは」(上二) なりぬ。その生前に親しみ厚き諸邦の好士へ此事を告むこそ、追善のひとつにもなりなんかし。さるに、ことし幸ひ美濃なる千阿風子の逍遙を待得て悼の集を編んと門人寄つどひうなづきあへるに、手向の吟のおなじことならんもをかしからねば、などいふ評ありき。因て司馬氏か遺草の例も」(上二) あれば、病中に詠ぜられし茶の花の韻をついで短哥行を始とし、其外釈教の句を題して所々連衆の人数に随ひ巻くをもあつめて、霊魂をなぐさめ師恩に報んとす。猶はた机上に残りし反故をさがし、いさゝか発句文章など拾ひて生前の行状をあらはし、ついで森々庵師の」(上二) 一章をも乞うけて庵の記念とは題し侍らむとなり。

魚坊三回忌追善集『菴記念』『庵のかたみ』

桃後園

于時寛政乙卯冬霜月下浣

路考

〔路考〕（刻陽）

」(上三)

今市 短哥行

茶の花や人目も艸も枯た時

しのお庵

杖の跡とふ雪の山里

吞乙

共ちから兄弟連の旅をして

千阿房

米はちいさい商ひでなし

乙烏

雲行もまだ定まらぬ月の秋

西入

厂におくれず鳥もいろく

里中

豊浦とてさすが昔の京なれば

如舟

何所へ出してもこちの智殿

壺仙

附合に廓通ひも有ならひ

免通

しまりもゆるき搦手の門

文露

咲花のあたりははやう明しらみ

霞溪

白粥すゝる所化の三月

柯石

二オころくともま銀こける母の文

以中

噂ほどには水も出ぬやら

さい

近頃は尾を見せられずはやり神

東隣

朔日ごとに奥も挨拶

入

六一

」(上四)

癖疾<sup>カクヒ</sup>に奇妙な灸の手柄して

横に道つく荻萩の中

我恋は片破月の片おもひ

さのみに鼻のひくいでもない

織田家より家に伝へし御感状<sup>ニッ</sup>

真東うけて旭てかゝ

茶湯にも其香を添て花供養

夢のごとくに三回りの春

○六句表

枯柳まからぬ針の釣の跡

子春の岸に人のかげろふ

女ども百物がたりこはがりて

行燈に油そへてかゝげる

朝もよひ紀の路へ月の笠すげん

芦に田鶴なく頃は身軽し

名録

小夜衣うつや空には厂の声

池水のまさるにつけてぬるみけり

いそがでも死る命を火とり虫

呑

舟

仙

以

石

溪

烏

隣

「(ウ四)

乙鳥

霞溪

西入

呑乙

東隣

壺仙

「(オ上五)

霞溪

文露

東隣

勢田の手は誰が魁ぞけふの月

荇て干す藻に飛ぶ海老の哀也

鳳巾まざる、鳥もなかりけり

秋の蠅やあかり障子に行あたり

露霜にも奉公はからぬか、し哉

あかぎりの足引ずりてひがん哉

誰も世は案山子の果ぞ骨ばかり

手ひとつや親の恩しる小夜礎

命より口は可愛し鰻汁

○

野は枯て美しきもの雉子ばかり

世話の世や花待かねる鉢の梅

○

きのふけふと光の陰のうつり行まゝに、ことしもはや霜ふり

月廿日あまり四日は、たらちねの三とせの忌とはめぐり来れ

りけらし。されや、とし頃したしき人々、遠き国々より

もつどひ集りて、追福の法会をいとなみ給はる。そのこゝろ

ざし、いとふかきかぎりのうれしさに「(ウ上六)」つけても、又

悲しさこそいやまさりぬれ。そは、ありし世の事ども、今も

目のあたり、その面影の我身に付添ひ、立さりもやらで、う

や／＼しく霊前に香花を捧奉りて

六二

免通

壺仙

以中

柯石

里中

西入

如舟

呑乙

乙鳥

「(ウ上五)

キツキ 百羅坊

小田 其泉

「(オ上六)

つもる雪に積る思ひや

しのぶ庵

さい女

九拝  
「(オ上七)

一本は遣ふて行や團うり

新宅の屋根に穂をさす雀哉

鴉ばかり濡ぬ声なり秋の雨

懐へ花吹込やひえおろし

いざよひのひづみをいふな月の友

夜中から後がまことの月見哉

車石

雨行

一字

三明

如虹

渡月

「(ウ上八)

○短哥行 一折

釣がねも氷る夜中のひゞき哉

座ぶとんに膝組で眠蔵

うざつきて虱か何歟あやにくに

雨も大かた晴になるべし

十里松月はなうても律の声

こちの旦那は秋をしられぬ

金の山積て高尾の身請沙汰

人はいはれず物思ひする

平治から六波羅の世と移りゆき

蝶鳥も舞ふ風の籟

花の蔭押合ふ中を羽織着て

竹馬の友に久しうてあふ

我為の接木ではなし老の世話

稲妻におびえてかける野馬哉

其下駄をこちらへまはせ虫の声

芋に酒むしろのうへの月見哉

大津  
似竹

渡月

如虹

筆

一字

雨行

車石

三明

都橋

指景

指月

筆

似竹

指月

松江  
指景  
「(オ上八)

都橋

○六句表

けふははや十夜に満るまゐり哉

しぐれの傘に貴賤老若

九重の都見て来た自慢して

集銭の鍋のまへに大膝

月花もおもしろいとはいふものゝ

柳はみどり松もおぼろに

名録

たらぬ日も男見に行すまひ哉

懐になくかと寒しきりぐす

やどるべき森は枯木のしぐれ哉

朝良やしほまぬうちのはき掃除

何の音角のおと秋のゆふべ哉

七夕になど水くさき備へもの

知井宮  
右硯

雨竹

雪釣

故交

湖厂

里丁

故交

里丁

湖厂

雪釣

雨竹

右硯

六三

「(オ上九)

○六句表

道の草枯て枝折もあだし野や

来しかた寒くかへりみる月

天が下ひろき源氏の世となりて

大工木挽もひく手あまたに

ざれをいふ旦那は機嫌上戸也

拭せて遊ぶ湯あがりの汗

名録

待合すわたしに船の雪見哉

ちるまでも桜くと諷ひけり

蝶くよ茨に羽をそこなふな

○八句表

起されて鐘楼へのぼる寒哉

報恩講に俄道心

打たえしもと傍輩の音信て

山鳥一羽袂から出す

花紅葉浦にはないと詠てあり

月をたとへば雲のうへ人

今まゐり旦那のをしへ聞て居る

膝のいたさに蒲の敷もの

神西湖 柳湖

其文

不尺

湖

文

尺

不尺

其文

柳湖

「(ウ)上九」

「(オ)上十」

古志 子由

李郷

吾友

杜若

文節

素遊

鶴遊

其丁

「(ウ)上十」

名録

身ひとつを気まゝに肥て種ふくべ

糸遊や立つ山鳥の尾にひかれ

かさゝぎの橋はくづれて霜ばしら

盃も八艘飛や涼み船

釣草に今宵もほしき蛭哉

十六夜やわたりもはてぬ勢田の橋

何の里も都の沙汰や初ざくら

稲妻のちつて入けり薄はら

柿やらん蜻蛉ははなせ寺子供

鳶の輪を吹きも崩さず春の風

若い名の春も夢なり下り鮎

鵜のつらの雪ながらに明にけり

ほとゝぎす余所にも待か飛んで行

負さうな男はみえず土俵入

百員 首尾

世の中を軽う悟りし紙子かな

火燵の山を雪に出うかれ

有明の杉葉に女酒うりて

肩に小萩を染し手拭

六四

吾友

鶴遊

文節

李郷

杜若

子由

素遊

己千

其丁

古吹

如新

扇風

都水

、よの女

坂田 見山

甫水

塘雨

楽只

「(ウ)上十」

「(ウ)上十」

任国のありて踊やはやるらん

ひとり旅寐に夢もむすばず

松風の呼べばこたふる浪の音

笑はれながら烏鵲の真似

見台に鼻かんで見る書生ども

宵の集銭の膳もそのまゝ

恋路から五月の闇に踏迷ひ

物狂ひよと児にはやされ

氏神のきげんに試楽賑はしき

あくびまじりに留主をして居る

花よりも団子のたとへ憎からず

好きなこといふ俳諧の春

名録

嫁取て見れば立たき幟哉

看経のうしろはくらき蚊遣哉

花さけば捨られもせじ藻くずとて

茶のからをさまして捨んきりぐす

河風も合点で吹か夏はらひ

をどり子の寐ても手をふるうつゝ哉

飯櫃へ又這入てや啼竈馬

なけよ虫なかずば人に踏るべし

魚坊三回忌追善集『菴記念』『庵のかたみ』

季之

芦吹

松友

岷水

波文

唇風

蓑滴

湖邑

雲子

一風

梅隣

琴雨

見山

楽只

蓑滴

三部  
塘雨

松友

雲子

琴雨

芦吹

「(二上オ)」

「(二上ウ)」

「(三上オ)」

天の川月は幾夜も渡れども

逃てさへ耳に残るや蟬の声

互にと頭巾もとらぬ隠居哉

花にこそ遠近はあれけふの月

田主にもいとま乞せで帰る尸

取おとす火打にちりし花重

座頭まで芋の月見や天窓数

杖曳けば出向ふ橋のほたる哉

○八句表

看経の疎きを忍ぶ霜夜哉

火桶にあぶる老の瘦膝

鎌倉は御めで度事のさたありて

渡し込合ふ川口の明き

角力取と見えて一際男ぶり

思ひみだるゝ菊の酒盛

月影も翠簾に傾く萩の露

声すみわたる松に梟

名録

朝顔のつるはあぶなき猿戸哉

淋しさのつもる落葉や塵の山

湖邑

唇風

黒首  
李之

甫水

沖の洲  
梅隣

直江  
岷水

中蔵  
波文

一風

松江  
野艾

知川

芽来

不撥

竿步

竹阿

青蘿

可川

城北武門  
一風子

大梅

六五

「(三上ウ)」

「(四上オ)」

山吹や影は添れず早瀬にも

桑の葉に追れがちなる蚕飼哉

高取の城なれきよいと冬の月

逸物の鷹や拳に眠り居る

見帰れば我も吹る、柳かな

手に頭巾さげて歩行や朧月

一ツ家の細き煙や夕しぐれ

涼しさやあらはれ出し川社

差合の咄し打消す碓かな

葺かへによごれし顔の暑さ哉

踏すへる階子の坂や猫の恋

涼みけり螢の草に戻る迄

けふも又雪に縄なふ鰯いそかな

梅咲やむき忘れたる背戸の注連

朧夜や白魚浮むさゝれ波

二声は二羽であつたかほとゝぎす

鳥の巢や来ては寺子の空詠

銭湯もけふはあやめの匂ひかな

降空はふる空にして月見哉

慰名 一(上十ウ)

泗滴

一風子内  
文子

止水

得志

逸歩

城南  
不撥

竹阿

芽来 一(上十ウ)

竿歩

青蘿

町  
可川

池清

蛙水

城北古人  
薄利

独往

連波 一(上十ウ)

知川

野艾

面壁の膝を崩して納豆汁

く、り頭巾に世界ひと吞

仲仕ども浜の囁ひ聞に来て

はやはら／＼と鶏が乱る、

千早振神に祝詞を上る月

秋のにしきを初凍の袖

北の方こゝろのうちに暇乞

三々九度にいはふさかづき

眠たがる鼻をこよりでこそぐらん

古門前の番をたのまれ

人たちも絶えず賑ふ花の頃

花のころとは弥生中旬

名録

分別も老てはかはる巨燵哉

桃の枝や手折ふり袖引とめつ

枯枝に木兔の目のひかり哉

落葉たく窓や覗けば鍋一つ

鞭打て時雨のり越す山路哉

淡雪やきえて淡たつ水の上

退屈をさせずや花の百日紅

加茂  
素琴

曾秀

路長

希得

桂紫

只琴

荷葉

琴

秀

長

得

紫

素琴

曾秀

路長

希得

桂紫

只琴

荷葉

六六

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)

一(上十ウ)



○歌仙行 首尾吟

炷く香の目にしみ入るや冬籠

庵にひとりお仏事の通夜

松の風先荷の馬の嘶きて

波もみどりに海はるかなり

新月と唐土人も誉ておき

まだ秋わかき弟子へ教訓

絹綺羅に伊達の薄着ぞうそ寒し

五万石には足らぬ殿町

小道具の掘出し物をよろこびて

買ふて置たと酒を妾が

散る雪に紛るゝ花の夕げしき

いづこをさして雲に入る鳥

名録

譲り合ふ人になれたる火鉢哉

辻堂の屋根も隠るゝはせを哉

道草に一りん花の枯野かな

客の手を取て揚屋の火鉢哉

もみ手して異見聞居る火鉢哉

袖にある頭巾たづるぬ鹿相哉

茸狩やさそひし客も押のけて

木次  
以聞

梧雲

柳水

笑山

文暁

笑鳥

桃川

卜川

木青

木子

菓仙

筆

以聞

笑鳥

柳水

梧雲

文暁

笑山

木青

「(七上ウ)」

「(八上オ)」

もとの水にもどりは又氷かな

うらの戸もさゝずに置ん夏の月

ちり塚を自慢に庵の落葉哉

○歌仙行 一折

うたれたる柱杖尊し冬籠

吾妻筑紫をおもふ雪の日

商人は穀物あまた買こみて

絹はうつらぬ男ぶりなり

有明の深山もはゆる紅葉狩

門の杉葉に新酒尋る

秋の風三味線ひきの哀れにも

むかし恋せし老の鼻かむ

面白し車あらそひ見て居れば

真西の岡に夕栄えの雲

住あかぬ草の扉の紫竹垣

喰ほどづゝは米くるゝ友

涼しさの月に童も遣れて

祭の能の衣装くらべる

及びなきかたへ尻目や通ふらん

御座船ながら御簾をすく影

桃川

木子

菓仙

「(八上ウ)」

三万屋  
長浦

維中

東明

鳥路

亀六

星河

桃下

墨後

長宇

有暁

素経

多中

邦直

李朝

岷考

亀六

六七

「(九上ウ)」

「(九上オ)」

吹よする霞の海に花の浪

厂も越路をしたひ帰るか

名録

鹿の音は笈もなうて消えにけり

接木して十日の雨に芽出し哉

眼鏡より涙こぼすやねはんの会

しぐれする里は土臼の夜なべかな

もどりにも弁当重し貝拾ひ

うら枯の尾花に残る夕日哉

夕晴や人待雪のわたし船

菊よりも先へ新酒の匂ひ哉

追ひありく箒にもどる蜻蛉哉

だまされて鳴たつ沢に暮しけり

炭の香や小家がちなる鞍馬道

子に迷ふ雀の親のさゝれけり

ゆるやかに橋踏む音や朧月

槽たくやけぶりに黒む老の髭

○六句表

風の日も笑がほなり石地藏

雪に迷ひを導きの松

寸松

索引

長浦

維中

墨後

亀長

星河

亀六

李朝

邦直

桃下

東明

寸松

鳥路

牧牛

素行

煙清月

桃露

吟じては古哥を感じぬ人もなし

袖かき合せ並ぶ賀の饗

月の雲衣が楯はほころびて

艸うらがる、秋はあはれに

名録

草花に添て売らる、胡蝶哉

最う一度吹れて寐ばや橋涼

月夜には咲ぬ艸にも露の花

いざ門にかざらん竹の雪ながら

抱し子を抱てもらふて踊けり

暇乞三度もしたり夕ざくら

出て見れば時雨ではなし松の風

○八句表

關伽桶に落て涙も氷りけり

身を捨習ふ木の葉衣に

王城の使者に茶漬を振舞て

馬の嘶きひゞく門先

舳をならべ千石あまた入つどひ

女郎を呼で遊ぶ相談

老ぬれど月待宵の浮ゝろ

六八

庭風

下学

霞暁

遊之

清月

庭風

下草

霞暁

桃露

遊之

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

遊月

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

「(上二)

湯殿の窓を覗く穂すゝき

庭柳

うかぶ瀬に最う一盃はのめかねて

岡崎立か諷ふ小室を

柳後

名録

きぬぐや氷で残る下駄の跡

庭柳

ほのぐと霞こめたる花の空

昔思

花に今留主してもらふ人もなし

仲恕

二オ 蕙るの君の袖はうらゝか

糸笑

瘦たがる女のくせやころもがへ

柳如

二オ 揃へて柴や黒木たばぬる

古道

花散ておもひのたねや桜の実

桑兒

頭陀の身となりて臥猪を見覚えつ

由之

月影の残るではなし屋根の霜

圭々

秋涼しさにうまさ喰もの

冬嶺

はかなさよ解る間もなき薄氷

松童

夜明まで何所も月見の笑ひ声

一柳

見るほどの物見尽して雪見哉

蝸牛

浪風たゝぬ君が代なれや

李山

思はずも踏でいたゞく落穂かな

文理

駒下駄を引ずりありく二人連

何遠

○短哥行

明星や木菟の目のうるむ時

江多路考

二ウ おもしろきうき世の嵯峨の隠れ里

洞李

寒梅さげて児の闕伽汲

草肥

菓子に童のたらされて来る

楽山

毛綿着に都恋しう思ふらん

臥牛

折ぐにひ出す人の花心

以文

筆のとめども状の長く

打柳

名録

鳥十

暮かゝる軒端に三日の月の影

逸平

牛の角ふつてもやはり蜻蛉哉

大馬木以文

唐黍の背の竹に紛るゝ

其明

見帰れば山行先は野のしぐれ

道楽

後から合点のゆかぬ頬かぶり

桃流

瘦馬の耳をすばめるあはれ哉

阿井何遠

恋に狂ふも若いうちなり

翠雨

坂ひとつ越れば近し小夜磬

一柳

道端や馬にふまれて咲く葦

梅咲や軒端に炭の明俵

辻堂や往来に囃ふ花分限

萩の戸や只寝ることの好きな

ひま／＼に艸の青みや残る雪

鶯につれてうたふや小室ぶし

うぐひすの二月は京の初音かな

懷で鼻ぬくめるやあじろ守

かひとらぬ裾もよごれず春の艸

時鳥思ひしまゝの山里ぞ

聞なれし波音ながら浦の秋

鴉さへせはしう啼かず春の風

梅咲や今朝よりあける窓のこも

秋の野の色に染てや露の玉

涼しさやわづか硯の海ながら

松島の数かぞへ見む朧月

初雪やふれ／＼笠につもる程

いさかひし人と笑ふて落し水

枝ごとに花さく雪のあした哉

初雪や今朝の手水に一つかみ

あふむけばまだ日も高き雲雀哉

洞李

由之

鳥十

李山

楽山

柳後

翠雨

草肥

さし

路考

横田  
虎笑

郡  
池柳

馬籠  
冬嶺

古道

其桃

八代  
臥牛

逸平

みさ

亀高  
昔思

其明

折る人もをらせぬ人もさくら哉

一番に大黒棚を煤はらひ

尻留ぬ遊び所や夏の月

縫物の手もゆるみけり鳴蛙

松原の日もつれなしや雉子の声

風に戻り荷のなき小拳かな

○備後八句表

月入て跡は枯野の無東西

霜夜の鐘の身にぞこたゆる

空言もしらず人まつ琴弾て

翠簾のひまより覗く小童

野良猫が飛ぶ鳥の影追ふて行

雨晴わたる竹の子の雲

卯の花に手鍋の煙りおもしろき

唐へもしれしおれが悪筆

名録

五月雨やけふも蓑面の瀧の音

月雪を余所に詠て網代守

風や山も眠りを覚す音

初雪に竹をとられて啼雀

七〇

葉子

櫻川

桃添

よし

一步

吉八  
石明

江田  
東下

浮雲

如柳

立和

富隣

指月

如是坊

舍律

指月

富隣

立和

如柳

「(六上廿オ)」

「(六上廿ウ)」

「(五上廿ウ)」

「(七上廿オ)」

門までは客のおほさよ夏の月  
蘭の香や腹は濃茶に飽たれど  
鶯や机に肘をかけながら

浮雲  
東下  
三表  
如是坊

栗栖野や垣根に瘦て菊の花

西六條  
窓雨

○六句表

恋に瘦し夜も有つらん鉢敲

米子  
千家

雪明に物やおもふミツバナ鱧

未芳

「(七上ウ)

茶漬をと竈の下を焚たて、

梅支

縁も目貫もあつらへに来る

維名

月の晴若殿原の角力見に

一亀

道も荒野の艸の露ちる

執筆

名録

夜嵐の朝や庭にも落葉山

伯州米子  
一亀

此闇にひとりありくか鉢敲

維名

朝寒やいさむ鍛冶屋の槌の音

亀狂

「(八上オ)

月涼し汐の干渴の砂のうへ

美啓

砂庭に箒目清し花の塵

千家

走り帆を横ぎり行や杜宇

鳥取  
未芳

梁の音する家や夜の雪

作州美甘  
梅支

○石州八句表

倅や伽藍の跡の霜ばしら

波根  
不鳴

寒夜に枕つけぬ石上

湖東

かくす名を呼ぶ声に顔ねち向て

長江

廓通ひの客はあまたに

悠子

よしあしも難波の三つの浦なれや

東

ちりにまじはる神ぞ尊き

鳴

安くと産もめでたき月の秋

子

紅葉にはやくあかねさす窓

江

名録

夕虹の橋は消えたり天の川

不鳴

うがや葺神代もあるに花見堂

湖東

みそさゝる茶がらさがして飛んで行

悠子

画たる虎もうそぶく扇哉

長江

○哥仙行 一折

風や鐘遠ざけつ近よせつ

神原  
帰鳥

順礼いそぐ日脚みじかき

茶隣

面瘦て見ゆれど若き袖袂

不鳴

○花洛

十<sup>ウ</sup>廿<sup>タ</sup>かぞふ囲碁のやさしさ

徐風

七二

せつけども端居に飯を忘れ居て

可節

名をしめて通ひ人やあるさいた妻  
落人の船場たづねて時雨ける

山中  
可由  
才坂  
布帆

「(二上オ)  
ウ」

浪こゝもとによする白浜

其遊

名<sup>ッ</sup>月のひかりちらめく花すゝき

可由

○三ッ物

夜長に禪の尻もすはらぬ

布帆

童気にも鬼は作らず雪仏

日貴  
烏隣

隠されず相撲をとりしちから瘤

芦洪

草紙ほしおく早咲の垣

文之

湯女のぬれるはよのつねながら

鳥

「(一上三)  
オ」

籠の中摺餌に鳥の音を鳴て

免雪

珍らしき筑紫琴をと望まるゝ

風

名録

とらはれの身になりて物うき

鳴

遊ぶ跡なき水鳥の道広し

烏隣

松風は盆も睦月も替らねど

遊

まだ寒き木の下陰や初ざくら

左文

賑ふ勢田の雪見螢見

節

ひびなるは似合ぬ桃のふとり哉

文狂

「(二上ウ)  
ウ」

和らぎも神の御国の人ごゝろ

帆

少将の恋の噂やほとゝぎす

市山  
文之

折ふし野菜くれるこえ取

由

雪の夜やしばしくらみて山かづら

勝市  
免雪

市のちりへだてゝ花の片折戸

隣

手の胼もいつかなほりて春の水

和田  
免角

雛の祝ひか諷ふざゝんざ

洪

「(一上三)  
ウ」

名録

○六句表

蚤に蚊に寐られねばこそ時鳥

帰鳥

慰みもかねて七野を寒念仏

渡村  
潮花

飼乞ふて馬桶ならず寒かな

茶隣

笠に茶山花かざす同行

習慕

落鮎も昼はしばらく淀みけり

徐風

酒の爛あるじは人を待つて

六珙

散らさじと松葉つゞるや蜘蛛の糸

可節

衝立こかす猫の呵られ

花橘

「(二上オ)  
ウ」

雨乞の日もわすれてや落し水

才坂  
芦洪

しづかにもまだ東雲の月くらき

机玉

五日の風に配る稲の香

名録

ぬき捨し花起直る大根哉

畔の鶴又向直るしぐれ哉

夜の明て物うき貞の月見哉

葉から葉へこぼるゝ音や笹の露

笛揚て貞さし出すや後の月

春の野の底の青みや薄霞

○三ツ物

口切やなき人おもふ初むかし

しめりて袖の寒き薫

禿らは朝もとうからざはめきて

名録

鶯や庵はせわなき放し飼

軽尻も地道に行や春の風

廿日過ても客のある牡丹哉

○歌仙行

西行のむかしを今に雪見堂

ゆきの三瓶は士峯の倂

魚坊三回忌追善集『菴記念』『庵のかたみ』

蛤楼

潮花

習慕

六珣

蛤楼

花橘

机玉

浜田蝶二

湖遊

芦調

芦調

湖遊

蝶二

大田里梅

魯文

隈どりを弟子へひそかに伝授して

さす盃をいたゞいてのむ

しほらしき居待の月の影法師

萩ふみこゆる鹿の細脛

ッ鄙下り小取使ぞおもしろき

宿の始に恋をしかける

白粉の顔にあばたもありながら

哀れをしらぬ焼香の供

砂のうへ若葉のうつる有明に

水無月ちかう線絡の鳴出す

文机に我怠りを恥られて

忘れがちなる二親の恩

神詣さそふ紋日の姉女郎

絵島は雨の晴てうつくし

咲花を一枝折て投入ん

酢烏賊に食のすゝむ初起

ニオ賭弓の勝負の論をして聞せ

非番仲間の肩に釣竿

俵ものおもき小腰をかゞめ行

門にいきれのたつ馬の糞

初霜に首途をたてゝ跡祝ひ

其文

里玉

鯉尺

其由

吞江

嗽石

魯邑

晴川

露明

得扇

楚江

まさ

里山

てふ

雲外

芦尺

圭浦

朝三

二水

林下

巴山

七三

「(三上ウ)

「(四上オ)

「(四上ウ)

残んの菊をかざす公達

言たさもいへぬ人目のわりなくて

湯治に心うかぬ逗留

立わたる霧の香くさき谷の坊

椎楠の幾代経ぬらむ

月の頃京の木工のぬめり顔

脱て婢へたのむ洗濯

茶の間はく機転もきゝし立廻り

宿夕はふけた何の相談

又しては武田長尾のいどみあひ

やすき此身や杖と笠とに

音楽の西に尊き花の雲

皆のおもひの行届く春

名録

鳶の尾のひねり加減や春の風

名月や花は日数もありながら

初鴨や大根はまだ水くさし

網提し人もありけり涼舟

宿乞ん小家も見えず鳴の声

牛部屋を這出る暮の夕かな

和名

ふし

暁雨

柳江

魯旭

峨山

花考

波光

草甫

半扉

桃雨

花眠

千阿坊

花眠

桃雨

其文

鯉尺

嗽石

吞江

人声のするもふしぎやかんこ鳥

山奥の人は人見るさくら哉

鷹にさへまたゝきさせる乙鳥哉

道のある世ともしらでやかんこ鳥

直を聞て又おどろくや初茄子

辻堂へなげ込稲の落穂哉

冬籠り夜が明たれば雪の花

谷川の水も朧やちるさくら

あがるほど手にこたゆるや鳳巾

明日しらぬけふの日和の小春哉

朝貞にうしろ見られな女七夕

朧からつゞく曇りや初ざくら

菊苗や遅き日影に育られ

脱やすき一重や芥子の花衣

ゆられても燈す柳の螢かな

水打や草にも星のやどるほど

花の香はたえて新茶の匂ひ哉

花摺の裾もやぶれつ旅ごろも

雪の日や帯ほど青き三保の松

相傘もふしぎな縁の時雨哉

蠅ばかり江湖の寺に残りけり

七四

圭浦

半扉

里玉

其由

峨山

露明

波光

里山

晴川

まさ

てふ

ふし

みち

よし

暁雨

魯旭

和名

芦尺

林下

花考

「(五上冊)

「(五上冊)

「(六下冊)

「(六上冊)

「(七上冊)



詠れば腹立直る柳かな

大森 逸鳳

風はまだ花の匂ひや衣がへ

巴山

竿おこせ我落し見ん竹の雪

土江 柳江

聃たつ鳥の羽音や松の露

二水

蛩うる人や宿には燈しかね

朝三

此たびは紅葉のひがんだくら哉

雲外

達戸忌やにらまるゝ目の有がたさ

得扇

うら枯の草葉や露は置ながら

魯邑

夢よりも先へ覺たる湯婆哉

楚江

こぼるゝや若葉の雫桜の実

野井 魯文

雪でさへくらみわたりて降夜哉

里梅

○

〔獨眠混沌以夢□□〕（剗陽）

ことしの秋もはや鴈は南に飛ぶ頃、例のあるき神にそゝなかされて、我は八雲たつ国の浦山にさまよひて、しぐれの空に身をはふらかし、周遊の折から、冬枯ししのぶ庵の故園にとゞめられ、蓑笠を脱て三回りの跡を弔ひ侍りぬ。爰に隣れる国々ゝの誰かれ志を等しうして、追悼の撰集」(八上冊)をおもひ立てゝにぞ。予ももとより渭樹江雲の情を通はし、花時鳥月雪の旅寐にも膝をくみ枕

「(八上冊オ)

「(七上冊ウ)

を双べし旧識断絃の友なりしより、その社中の信を感慨し、ともに梓行の力を添んとす。かねて手向し一章に

この世からひかりはなちて雪仏

といふ吟を思ひ出つゝ、けふの法会」(九上冊オ)にも拙き言の葉を述

て墓前に備へ侍るものならし

なき影を

としぐゝ見せて雪仏

千阿坊

〔万事観〕(剗陽)〔佳一之印〕(剗陽)

(白紙)

「(九上冊ウ)

「(紙見返し表)

「(裏表紙)

「(下巻表紙)

「(見返し紙)

庵のかたみ 坤

(白紙)

潜魚庵記

宝暦庚辰の春、はからざるに回祿のわざはひにあひて、其冬、仮にしつらひし容膝の栖も、わづかにひとゝせを経ぬれば、屋根もり壁落て露霜をいとふによすがなく、しきりに一把の草庵をおもひたちて、市中を避る事二百歩ばかり、真室山の」(下二冊オ) 巽城平といふ所に、しかぞ住はべるそのかみより人の住伝へにたれば、おのづからなる古井もありて、竹のはやしのみどりもふかし。後

## 剃髮文

に北邙の墳蛩をつかねて、松ふく風の音さびしく、慈雲禪刹をむかふにあて、開静の闇を觀ず。あなたに往かふ馭馬の鈴、こなたにかよふ草刈うた、ほとゝぎす」(ウ下二)のあけぼのをし、のび、蛩のゆふぐれを待しより、早苗とるころもや、近うなれば、あたりなる家にならひて茄子をうゑ、夕顔に培ふ。薪乏しきときは、軒端の山に松葉を拾ひ、こゝろおもむく時は谷の流に灰吹をあらひて坐す。さりとてかの潤明が三径のむかしを真似ぶにもあらず。

又兼好が安部野の」(オ下二)筵も織らず。妻あり稚子あり。士ならずして恒の産なければ、富貴の門に膝をかゝめて道をうり、師をはづかしむる人とも、人はたいふなるべし。そのいふ人、言はるゝ人ともに、とゞまるべき世にしあらねば、是非は一世の唇皮に朽ぬらむ。我は我に備はれる我を養はんには。もし人わがそのたのし」(ウ下二)むところをしらんとあらば、よりく蓬蒿の扉をたゝいて一啄一飲の腹にみてるをみよ。鳥にあらざれば、林のたのしきをしらず。魚にあらざれば水の樂しみをしらず。もとより大鵬の雲の万里をうらやまず。しばらく生涯のはかりごと、のたまひし跡をしたひ、只此一筋をたどりて、朝夕」(オ下三)自然の道理にあそび、其日くの足ることをしれらんには、雫の水に潜りし鰻の魚の類ひならん人も。

宝曆壬午仲夏日

我としごろ薙髮の望ありしも、何くれとしていまだその本いを遂ざりしが、去年のあき、一子を失ひて、させる」(ウ下三)ほだしもなければと、其愁にかづけて、世上の時宜も調べ、頬におもひたつか弓、そりしは除夜の暁ならん、春たちかへるあしたには、人も驚きあへりけり。さるは遠く恩愛の道を放れ、近く無為の樂しみに入らんとにはあらず。髮結ふことのむづかしければ、自剃の自在ならんとや。多病」(オ下四)もとより俗をつとめざれば、俗にして俗にあらず。今又僧を修せざれば、僧にして僧にあらず。鳥鼠の間に名をかうぶりの鳥なき里にさまよひありきて、しばらく生涯をおくらんとなり、かの樊中にやしなはれんより、飲啄の乏しからんには、三公のたふとからんも江山の樂しからんも、世はた己がさまぐ」(ウ下四)なりけり。かつて回祿の災にあへるより、市中を避る事十とせばかり。笑ふ人あり、うらやむ人あり、譽るもそしめるも、空吹風の狂客となりて、いくばく人の食をむさばるに、捨る神あれば拾ふ神ありて、来るを待侘び、去るをうらむ。是、只祖翁の徳なるべし。是、只老師の恩なるべし。穴賢。我が」(オ下五)俳諧を学ぶべからず。我が学ぶ所のはいかに学ぶべしとなり。

春さむし剃たあたまの無分別

明和六己丑のとし

## 栖去辞

蟻の穴を穿ち、蓑むしのみのをいとなむも、皆たゞ天にして、木に巢くふ鳥あり、水にひそむ魚あり。我、いづれ」(ウテ五)の年にや、市中を避て一草廬を結ぶ。名づけて潜魚庵といふ。是、一生の閑をぞするにたれり。しかるに近きとし、いづくともなくあし曳の山の山猿の来りあつまりて、軒近ういとかしがまし。よつて又、猿中窟と号す。此猿や、巫峡のあはれもなく、ゑほしきて人の真似するをかしみもなし」(ウテ六)朝四暮三の欲のみ。みだりに花を折り、木の実をあらず。おもひしまゝの山里ならで、爰も住うく思ふ折から、出雲の国坂田なる琴書堂の傍に住すてし茅舎あり。所々経回のたよりもよろしければ、来よかし、来たらんか、来たりて老をも楽しめ、など信ふかきさ、やきにうなづきて、頻に彼地に趣」(ウテ六)かんとす。もとより妻子をも具しながら風葉の軽き境界なれば、身にしたがふ調度もおほからず。草庵は甥なるものにゆづり預けて、ことし安永八己亥のとし睦月九日、いざ、らばとて住馴し草扉を引立て出ぬ。

○旧庵を去る事十有余里、出雲の国坂田の里に転居す。此所はすべて」(ウテ七)田莊の風流にして、山遠く、水近く、臨江庵と呼ぶ。柴門南にむかひて東に大仙あり。西に三瓶山あり。月雪のながめ乏しからずというべし。もとより琴書堂の傍なれば、あるじの物数寄より春の花をも植ならべ、秋の草をも掘うつして、世づかぬ

楽しみとなさしむ。さるはひとかたならぬ因縁にして、楽の」

(ウテ七)老をも養はんとなり。しば／＼してうとまれざるは、それ風雅に談笑の友なりけらし。

○爰に五とせあまり六とせばかりの光陰をおくり侍るが、はからずも水難の事ありて、又隣江庵を出るに、庵の柱に書付置て、卯月のころか、立さりぬ。

定らぬ栖や鳩の巢のこゝろ

」(ウテ八)

○臨江庵を住捨てよりしばらく無庵の境界なりしが、蝸牛家のなくてはなど、したしき人／＼の信にまかせ、今市の駅に古宅をしつらひて、師走もやう／＼半過る頃、まづ膝を容る。市声わづかにへだゝりぬれど、さすがに物しづかなれば、老情を養ふにたれり。今よりして、たま／＼我を」(ウテ八)尋る人あらば、此地にしのぶ庵といはむもむべならんか。

天月乙巳年

## 煙草吸ふの辞

我に好物のひとつあり。禪家の戒をもどき、貝原が理屈をわらひて、月に坐し花に対するの時はさら也。雨のふる日も雪の降る夜も、起てはくゆらし、寐ては」(ウテ九)くゆらす。かの蟹の楼閣をうかべ、鉄拐がかたちをあらはす術はしらず。千賀の塩竈の遠きをおもひ、岫を出る雲の無心なるを愛して、鳥部舟岡の無常を觀

ずるにはあらざめり。たばこ吸居て戯書。

五竹先師の句に

蝶はしらじ此花の香の吸ひごゝろ

「(下九ウ)

### 長瓢花生銘

此ものもとより目もなく鼻もなし。口あり。口業を戒む。耳なくしてよく聞け。

古人ノ句

人の短きをいふ事なかれ

己が長きをとく事なかれ

主人愛して千金にもかへず。もしや其寵おとろへなば、江湖に出て鯰をおさゆべし

「(下十オ)

### 弥女賦

出雲の国阿井の里とかや、ひとりの老婆あり。小町がなれの果とも見えず。無塩がごとき賢女とも聞えず。かつらぎの神の女と現じ給ふならば、など昼の人目はつゝみ給はずや。髪はつくもの俤にたちて、いかなる人を恋らんとをかし。そのかほはせ、世にいふおたふ」(下十ウ) くのたぐひにもあらず。痘顔へんばの理屈をはなれ、鼻に似て、又異なり。さりとて瓢のすねくりたるにもあらず。南瓜のひねくりたるにもあらず。蛸壺のさびにあらざれば、

楽焼の風流には猶あらず。それにもあらず、是にもあらず、黒うるりといふものに似たりけり、など笑ひ興ずれば、夕の雨とや」(下十ウ) なりけむ、朝の雲とやなりけん。行かたをしらず。

### 四季吟

春の色みなさそひ出す柳かな  
鶯や夜雨の雫日の匂ひ

梅をりに来ては紙衣を破りけり  
恋ゆゑに野猫となつて仕舞けり

世の中は達者なうちぞ山ざくら

「(下十ウ)

### ○

世の事は聞ぬ耳なりほとゝぎす  
葺やあやめ五尺に足らぬ庵まで  
親里は嵯峨のあたりか竹夫人  
すさまじの夏山伏や雲のみね  
夕顔や一杵米はまだ黒し

「(下十ウ)

### ○

あの星かゝとてまつりけり  
世の中や山鳥の尾にうづらの尾  
水梨子の水も満たりけふの月  
秋の蚊や死る命を憎がられ

菊の日や杖突て来る友ばかり

○

茎漬に重石の利し霜夜かな

馬の骨馬に蹴らるゝ枯野かな

吹荒て尻なし川に鳴ちどり

山鳥の尾や曳ありく雪のうへ

○名所

北嵯峨やけふもしぐれの幾たびか

霧の香の鼻につきけり木曾の旅

飛ぶ鳥も鳴戸の汐におくれけり

黄鳥

日もうらくとけふや初音の

谷の古巢はいつか出しぞ

長刀もなき我宿なれば

花ふみちらせ心安くも

竹

よゝこめて色かへぬ

松に其名を並ぶ

よく雪に折るゝとも

魚坊三回忌追善集『菴記念』『庵のかたみ』

いつまでも根はたえず

○

おもひやれひもじが原のいとすゝき

露の命のこゝろほそさを

山里ははやくも雪のふる狸

あな寒しとや冬籠るらん

海辺霞

春霞立そめしよりあま衣

まどをになりぬすまのうら波

夕納涼

夕月の影さへうつる涼しさに

あかずもむすぶ山の井の水

初秋月

秋来ぬとゆふべの雲のたえまより

ほの三か月の影もさやけし

向炉火

消残る我身の友も今は世に

あるかなきかの夜半の埋火

立名恋

末つひになびくとならばうき雲の

「(四下オ)

「(三下オ)

「(三下ウ)

「(四下ウ)

そらに立名も何かいとはむ

「(五下オ)

潜魚庵閑適

流水古城下 結廬已十霜

鳥歸東嶺樹 免隱北隣牆

詩筆羞才短 琴棊愛日長

勿言生計薄 天命復何傷

曇溪師見訪

草廬何所見 秋色滿前山

適有風流客 夜來伴月還

「(五下ウ)

〔珠樹雀〕(剗隱) 跋

潜魚庵のあるじは、石見の国をうかれ出て、出雲のくに、住ところとめけるが、かしこにては火の災にかゝり、爰にては水の難にあひて、またおなじ国の今市といふ処に世をかりそめの庵をむすびてぞすめりける。かゝる災をも物うしとも」(六下オ) 思ひたらず、只風雲にのみ心をよせ、和漢の才も拙なからねば、おのづから人を驚す句をいひ出ぬるか。文人の身の不幸なるは、いにしへよりのためしなれど、此人をうしなひけるこそ、かへすゝも口惜しきわざなれ。ことしかの三回忌にあたれば、みのゝ千阿房、その」(六下ウ) あたりの人々を催して、追善の集をあむ。予は

峨々洋々の知音なれば、巻のしりへに筆をくはへ、古き友がきのこゝろをあらはすのみ。

年を経てなほ山寒く水寒し

森々庵

〔真空房〕(剗隱) 〔道阿彌印〕(陰刻文)

「(七下オ)

蕉門書林

皇都寺町通一條 橘屋治兵衛梓

(白紙)

「(下巻裏表紙見返し)

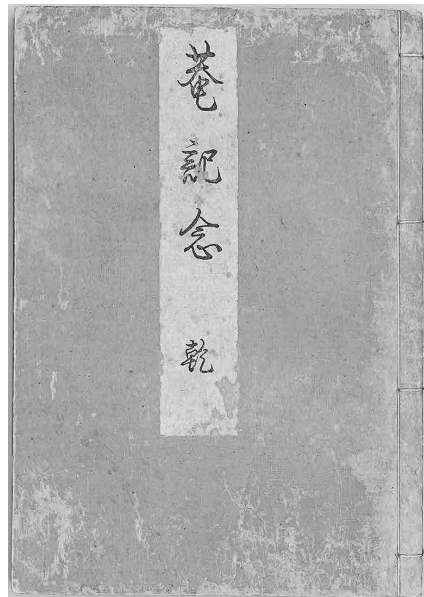
「(下巻裏表紙)

〈付記〉

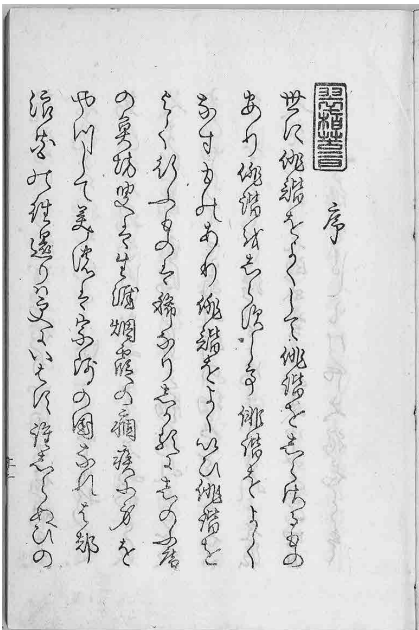
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九―二〇二二年度、代表・田中則雄)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「化政期俳諧再評価のための新研究」(研究課題番号18K00296 代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

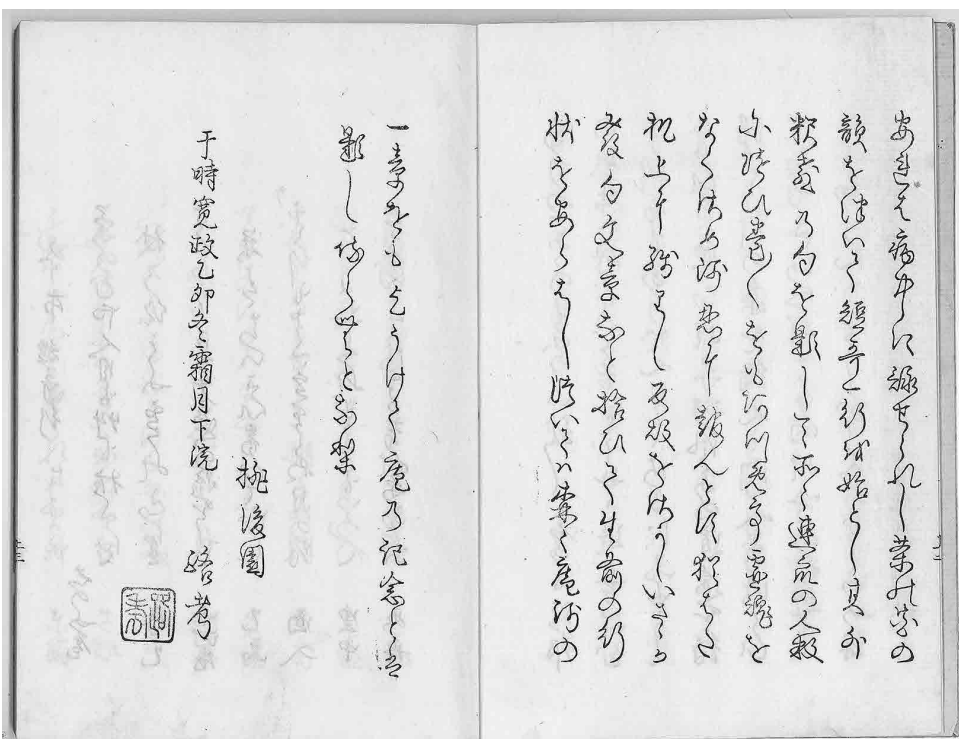
1. 上巻表紙



2. 序文冒頭（「上二」オ）

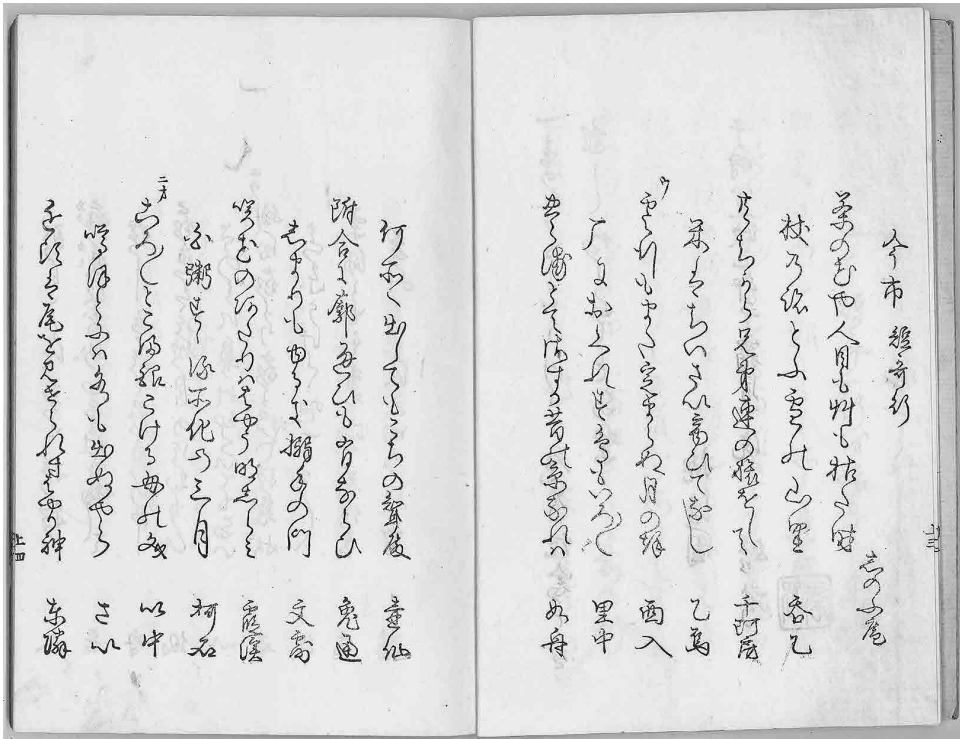


3. 序文末尾（「上二」ウ・「上三」オ）

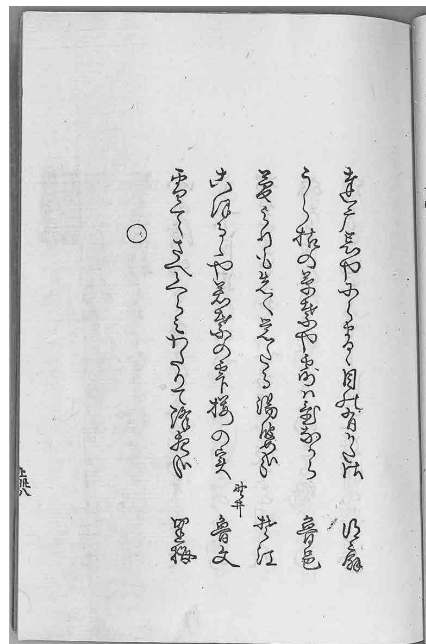




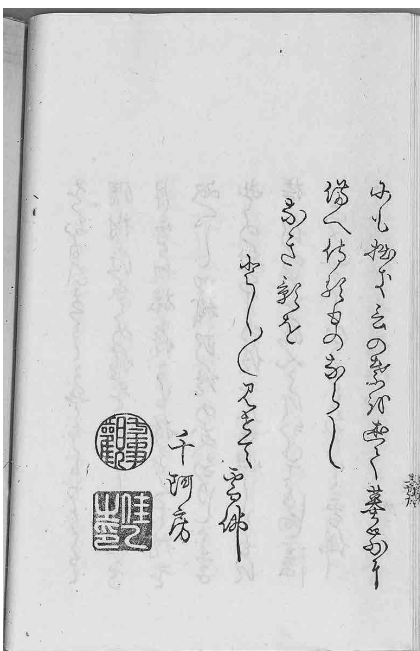
4. 上卷本文卷頭（「上三」ウ・「上四」オ）



5. 上卷本文卷末（「上卅八」オ）

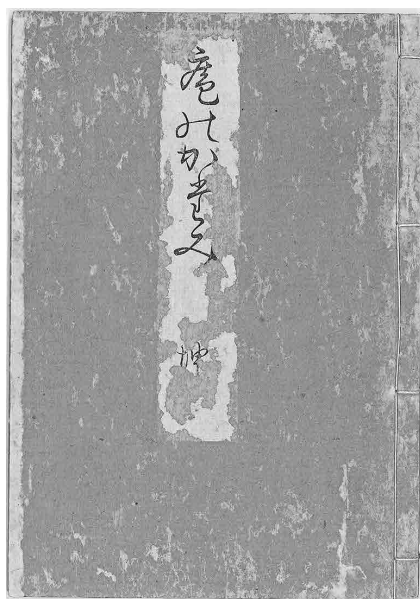


6. 上卷跋文「千阿房」署名（「上卅九」ウ）

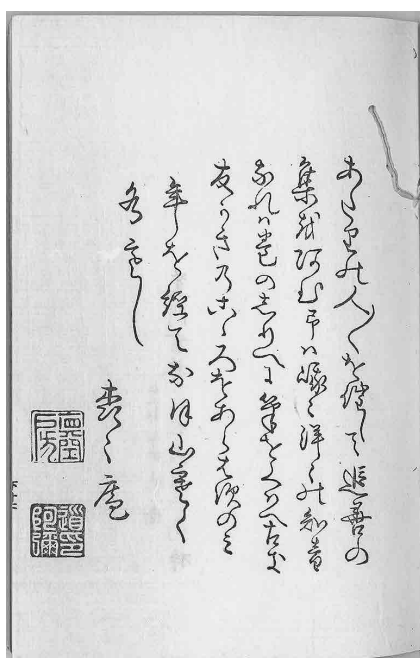




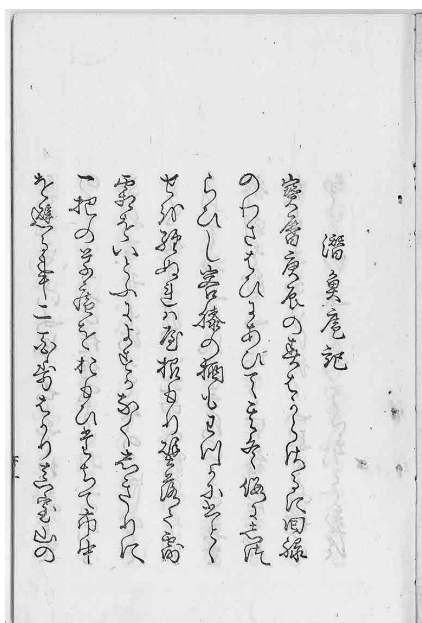
7. 下巻表紙



9. 下巻跋文、森々庵署名 (「下十七」オ)



8. 下巻巻頭 (「下二」オ)



10. 刊記 (「下十七」ウ)

